



河口湖湖上祭と吉田の火祭りに参加して

富士吉田教育部英語担当 講師 吉川 裕介

この夏、富士吉田キャンパス所在地である富士吉田市ならびに隣接する富士河口湖町で行われた、伝統な2つの行事に参加しました。1つめは、8月5日に開催された河口湖湖上祭です。今年で第98を数えるとのことで、大正時代から続けられている伝統行事だそうです。昭和大学も数年前から花火を提供しているとのことで、昭和大学の大学カラーである青をベースにした花火が次々と夜間で花開くと、小口理事長をはじめ、富士吉田教育部の教職員から大きな歓声が上がりました。湖上に打ちあがる花火は、都会で見る花火とはまた違った趣があり、特に湖面に扇状に打ち上げられる花火は、湖面に映し出される光



“ありんこ祭り”のボランティア活動を通して

医学部 鈴木 健悟 (桐蔭中等教育高等学校出身)

今回、初めてボランティア活動に参加しました。初年次体験実習の実習先であった障害福祉サービス事業所「ありんこ」主催のありんこ祭りにおいて手伝いをするという内容でした。初年次体験実習で利用者さんとうちコミュニケーションをとればよいのか、ある程度わかってはいたつもりでしたが、話そうと思うとなぜか緊張してしまい、初めのうちは上手に話せませんでした。しかし、屋外では演奏や踊りなどのイベントで盛り上がり、利用者さんたちも笑顔で楽しそうに自分の仕事をしていたので、次第に緊張もほぐれ、いつの間にか自然にコミュニケーションをとっている自分がありました。

利用者さんも自分と同じで楽しいときは笑い、悲しいときは泣くと思います。障がいを持っているからといって特別視するのではなく、自分たちと同じように接することが大事であるとわかりました。今回のボランティア活動を行い、大きな経験を得ることができたことに対し、ありんこの皆さまに感謝申し上げます。



が相まって綺麗な真えんを描くのがとても感動的でした。

2つめは、8月26日に行われた、日本三奇祭のひとつにもなっている吉田の火祭りです。なんと500以上も続く行事だそうです。富士山駅の前から金鳥居、そして上宿交差点にかけて、高さおよそ3mの大松明が70本ほど立ち並びます。祭りが始まると、諏訪神社を出発した2基の神輿が松明を並べた通りを立ち並びます。点火は下から順に行われ、小口理事長によって昭和大学の大松明も無事に点火されました。幅4mほどの細い道の両脇には多くの屋台が軒を重ね、中央には大松明が並びます。見物客は松明の薪がはじけ、火の粉が降りかかる中を通りぬけなければなりません。まさに熱気に満ちた祭りでした。

これらのお祭りのように、学生が熱意をもって大輪を咲かせる一助になるよう尽力しようと思いを誓いました。



「Mt.Fuji河口湖ジャズフェスティバル」ボランティアに参加して

歯学部 杉本 真子 (光塩女子学院高等科出身)

河口湖を囲む山々が彩りはじめ、空は青く透き通った11月2日、涼しい気候のもとで「第6回 Mt.Fuji 河口湖ジャズフェスティバル」が開催されました。昭和大学からも、アカペラとMASが参加しました。迫力ある歌声と楽器の音色が河口湖円形ホールに響き渡り、会場内は人が溢れるほど。観客はリズムに合わせて手拍子をしたり体を動かしたり。一曲終わるごとに盛り上がり、会場は温かい雰囲気になりました。その場にいる人を魅了し、人々の交流の橋渡しに存在する、そのような音楽の力に圧倒されました。

ボランティアにはいつも「学ばせていただく」という信念をもって参加しています。新しいことを学び吸収して、新たな視点で物事をみられるようになる。自分の人間としての幅が広がる機会だと思っています。人に支えられていることに感謝しながら、これからも積極的に多くの人と関わり合い、成長することを目指していきます。



富士登山競走 救護ボランティア

地域交流委員会 委員長 堀川 浩之

前期一時退賽日の翌日である7月25日に開催された富士登山競走に、救護ボランティアとして1年生27名、救急医研究会の上級生8名の学生と9名の職員が協力しました。この大会は富士吉田市が主催し毎年実施されているもので、標高770mの富士吉田市役所をスタートし、吉田口登山道を通り山頂を目指します。救護スタッフは、富士吉田市立病院の医師や看護師を中心として救急救命士などが加わり、救護体制が整えられています。

大会当日、ボランティア参加者たちは早朝5時50分に揃いのスタッフシャツに身を包んで集合し、5合目までの各配置場所に移動しました。レースでの救護活動は予防に重点を置いたもので、疲れが見られた選手に声かけを行い、その選手のゼッケン番号を次の配置場所に通報するなどの対応を行いました。また傷病者が発生した配置場所では医療スタッフの活動を手伝った学生もあり、貴重な体験となったと思います。



「フジコレ」に参加して

薬学部 高橋 菜子 (新宮高等学校出身)

私は今回の「フジコレ」に参加して、ボランティアが何なのかということに改めて考えました。それは今までボランティアとは誰かのためにやることだと思っていたからです。

活動内容は、お客さんにアンケートに答えていただき抽選をしてもらうという内容でした。私の宣伝の声にこたえ、地元の人達は積極的に参加してくれました。地元の人達が山梨県に対してどのように感じているのか、地元に対しての愛などを知ることができました。様々な方と交流していくなかで、自分が今ボランティアとして活動しているということを忘れていました。目の前にある仕事をこなしていくことがボランティアなのではなく、普段通りしていくことでもいいのだと感じました。

私は今回「フジコレ」に参加して、日常の中にボランティアはあるのだと思いました。日頃から自分のできることは何か考えながら行動するとともに、またこのような機会があれば参加したいと感じました。お世話になった皆様に感謝申し上げます。



編集後記

紅葉の美しい、短い秋が過ぎ、いよいよ富士吉田は本格的な冬の到来です。富士山の頂も広く冠雪し、キャンパス内は冬物を着込んだ学生ばかりとなりました。年内に完全退寮を迎える学事歴が定着し、この時期は後期定期試験や寮内各部屋の片付けで学生は勿論、指導担当教員も慌ただしくなっております。さて、『白樺・百合』もおかげさまで発刊から7年、通巻23号となりました。年末に発刊

する号として6面構成が定例となり、前期退寮日以降のボランティア活動をはじめ、後期開始後すぐの初年次体験実習や学生主体のイベントである「ハロウィンパーティー」、「クリスマスパーティー」までを網羅した誌面を組みました。充実した学生生活の様子が伝わりましたら幸いです。今後とも「白樺・百合」をよろしくお願いたします。

編集委員 高田中成



白樺百合

昭和大学
富士吉田キャンパスだより
第23号 2014.12.18 発行

発行責任者 富士吉田教育部長 小出良平
編集責任者 富士吉田教育部広報委員長 倉田知光
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 4562
TEL 0555-22-4403

医学部 高野 英実 (鳴友学園高等学校出身) 撮影

富士吉田での一年間をふりかえって

富士吉田教育部英語担当 教授 高橋 留美

富士山麓の大自然に抱かれたキャンパスで学んだ一年間は学生のみなさんにとってどのような意味をもってののでしょうか。

一般に大学初年次は、学生にとって社会に出るまでのモラトリアムであることが多いでしょう。対照的に本学では、学生は入学時から医療者になる者としての自覚をもつように奨励され、医療者となるのに必要な知識を習得するための専門教育と初年次体験実習をはじめとする実践的な教育を受けます。

同時に、物理学・生物学・化学といった自然科学の各分野を改めて深く学ぶ機会を与えられて苦労した人も多かったことでしょう。これらの科目と数学は医療的専門知識を習得するための礎として重要であり、これらの基礎分野の知識がしっかりしていなければ、医療的な専門知識や技術を覚えようとしても理解が浅いままに留まり、言わば砂上の楼閣となる恐れがあります。迂遠なように思われても、土台となる各分野を基礎から正確に学ぶことは大切なことだったはずですよ。

学校のことを英語では school と言いますが、語源は古典ギリシア語の skholē (スコレー) であると言われています。意味は「暇」ということですが、古代ギリシアで学問が発達したのは働く必要がなく暇な時間を仲間との議論に費やしたり、音楽や芝居を楽しんだりすることで過ごすことのできた市民が存在したからだとされています。文学や芸術といった一般教養は選択科目として初年次カリキュラムに用意されていますが、みなさんは各々の興味に合わせてそれらを選択したことと思います。実学のようにすぐには役立たなくても、得た知識は心の糧となり、人間としての豊かな成長を促してくれたことでしょう。深みのある人間となるためには、こうした幅広い教養と教養を通して得られる物事を多角的に深く考える習慣が欠かせません。

近年はグローバル化が進み、人々の活動が国内に留まらず広範囲にわたるなかで、コミュニケーションのツールとしての語学がますます重視されるようになりました。本学でも必修の英語だけでなく、さまざまな言語やその言語が用いられている国々の文化を学ぶ機会が得られるようにカリキュラムが組まれています。日本語と異なる特徴をもった言語を学ぶことで視野が広がった人も多いことでしょう。

みなさんは、もうすぐこのキャンパスを巣立っていきます。将来、ここで得た知識や教養があなたの方の行く手を照らす灯火の一つとなることを願っています。人生には苦しい局面もありますが、挫けずに自分を信じて前進してください。

Per aspera ad astra. (苦難をとおして星に至れ)

広報誌名称について

全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮(男子寮)」「百合寮(女子寮)」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した「白樺・百合」という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごとに成長をとげて前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでくれることへの願いが込められています。

初年次 体験実習



病院実習

医学部 下郷 雅也 (学校法人東海学園東海高等学校出身)

私は今回の初年次体験実習の一部である病院実習で富士吉田市立病院へ伺いました。そこではたくさんお話を医師以外の方からいただきました。

お話の中で特に印象に残った言葉があります。それは放射線技師の方の「放射線科では0.5mmのズレが大きな事故を招く。私は0.5mmも妥協しない。」というものです。このお言葉から医師と連携する方の熱意を感じ、このような方たちと連携して働きたいと感じるようになりました。また脳外科の先生が画像診断をしている姿を見ることで、自分が最も興味がある画像診断や脳といった分野の最先端の技術に触れることができました。ほかにも多くの従事者の方や患者さんの姿を拝見し、命に関わる仕事の大変さと大切さを見て学びました。

今回の病院実習を通して私の中で擦られたもの、それは好奇心でした。一年次からの積極的に将来働く場を見るこのような機会は将来像を見えやすくし、日々の勉学を意義のあるものにしてくれたと思います。一日という短い時間にもかかわらず、とても濃密な内容でした。最後になりますが、今回見学する機会を与えてくださった病院の方々に感謝を申し上げます。



施設実習

薬学部 高田 紫苑 (実践女子学園高等学校出身)

私が初年次体験実習をおこなった先は介護老人保健施設でした。施設は入所、グループホーム、リハビリテーションセンターといった形態の異なる施設に分かれており、三日間すべて違うところで実習をしました。

入所やグループホームでの実習で、コミュニケーションの取り方の難しさを痛感しました。また、本当の意味で傾聴とは何かということも分かっていませんでした。しかし、三日間を通して施設の方々に教えていただいたり、施設の方々が利用者さんと接する姿勢を見学したりするなかで、自分なりの答えが見つかったように思います。傾聴することとは、利用者さんの話を聞くことだけではなく、利用者さんの話が展開されるように、相槌を打ちながら質問をすることです。また、コミュニケーションをとる手段は言葉だけではなく、手を握る、背中を摩る、相手の目を見るといったことだけでもコミュニケーションになるということも学びました。

リハビリテーションセンターでは歩行訓練を見学し、利用者さんに話をうかがいました。大切なことはやる気を引き出し、無理なく続けてもらうこと。それぞれの場所によって利用者さんのニーズも異なり、私たちが接し方を変えなければいけない。このことは、将来にも通じる場所があると考えました。

最後になりますが、三日間の施設での実習はとても有意義なものとなりました。今回の実習で得たものを活かして、これからの勉学に励んでいきます。施設の皆様、ありがとうございました。



心肺蘇生実習

薬学部 長澤 美侑 (東海大学付属浦安高等学校出身)

救命救急法実習は、初年次体験実習の一日を使って行われました。実習内容は、救急法実習と心肺蘇生実習です。

救急法実習では、三角巾とガーゼを用いた傷や骨折の手当ての仕方について学びました。また、一人または複数人で傷病者を搬送する方法についても教えていただきました。一方、心肺蘇生実習では、心肺蘇生法およびAEDの使い方についての知識および技術を習得しました。さらに、乳児の心肺蘇生法と異物の除去についても学びました。

この実習を通して、仲間と協力して人命を助けることが重要だということを実感しました。傷病者発見から救急車到着時間までを想定して、3人チームで心肺蘇生法とAEDを用いて人命を救う訓練をしました。胸骨圧迫で体力を消耗し、長時間一人で心肺蘇生をするのは大変です。救急法実習でも一人で傷病者を搬送するのに大変苦労しました。したがって、多くの人の助けと積極性がなければならないと痛感しました。また、傷病者に対しての心肺蘇生や応急処置を行う自信にもなり、もし傷病者を発見したら、この経験を活かして人命を助けたいと考えています。



ポートランド・州立大学 サマープログラムに参加して



薬学部 宗友 咲子
(文教大学付属高等学校出身)

私はこの夏、7月28日から26日間にわたるオレゴン州ポートランドへの留学に参加しました。現地に着くと、大学のスタッフが暖かく私達を迎え入れてくださったことが私達の自信に繋がったのを今でも覚えています。大学に着いた後、ホームステイ先へと移動し、2週間のホームステイが始まりました。

現地では午前中に英語の授業があり、午後には医療施設を見学したりショッピングをしたりしました。授業は室内で行うだけでなく外に出てミュージアムやマーケットを散策したこともあり、毎日の授業が楽しみで仕方ありませんでした。午後の活動の中で特に印象深いイベ

ントはラフティングです。日本にはない大自然の中でボートに乗り、仲間と最高の思い出を作ることができました。私はその日1日に体験したことをホストマザーやスタッフと話すことが毎日の楽しみであり、英語を話すことの楽しさに気づきました。最後の10日間は大学の寮で過ごし、勉強だけでなく様々なアクティビティを経験することができました。

このように、ポートランドでの思い出は数えきれないほどあります。この留学を通して私は、勉強面だけでなく日米の文化や医療の違いも学び、人間として成長できたと実感しています。



クリスマスパーティー開催!

クリスマスパーティーを開催して

クリスマスパーティー副実行委員長
薬学部 江部 靖弘 (新潟県立長岡高等学校出身)

クリスマスパーティーは吉田生活最後のビッグイベントです。本来のクリスマスは12月ですが、富士吉田キャンパスでは12月中旬から後期試験が始まり、クリスマス前には退寮してしまうため、11月下旬に開催されます。今年はバンド演奏やアカペラ、ダンスの他に様々なイベントがあり、参加した全員が全力でパーティーを楽しんでいました。どのイベントも大変盛り上がり、会場となった第一講堂は11月下旬にもかかわらず、むせ返るような熱気に包まれました。準備期間は1ヶ月弱と大変短く、本番に間に合うかが心配でしたが、実行委員には積極的な人が多かったためお互いに支え合い、無事に本番を迎えることができました。私は副実行委員長という立場でしたが一人では何もできず、協力して一つのものをつくりあげること、他者と助け合うことの大切さを知りました。当日は学生や先生方も一緒に楽しんでいて、クリスマスパーティーは大成功を収めました。出演者やスタッフ、観客全員にとってここ富士吉田であった楽しかったこと全て最高の思い出となったのではないのでしょうか。

University



点灯式

クリスマスパーティーの幕開け

中央委員長 医学部 山本彩夏 (志學館高等学校出身)

クリスマスパーティー開催に先立ち、百合寮前の中庭にてイルミネーションの点灯式がおこなわれました。アカペラ部や管弦楽団部によるクリスマスソングが披露され、学生全体のクリスマスムードが高まってきた頃に、10,9,...3,2,1という学生のカウントダウンに合わせて、サンタクロースの衣装に身を包んだ田中一正学生部長と同じくサンタクロースの衣装を着た私山本とで点灯レバーを押しました。イルミネーションが点灯されると、学生から「わあっ」という大きな歓声が上がりました。クリスマスパーティー実行委員装飾部門の方々の毎日夜遅くまでの準備、そして学校の職員の方々のご協力もあり、点灯式は学生一同が歓喜に包まれるクリスマスパーティーの幕開けとなりました。

街中より一足早く点灯されたイルミネーションが、点灯式後に始まるクリスマスパーティーを心待ちにする学生の輝く顔をひとときわ明るく照らしているようでした。



ハロウィンパーティー 新しい伝統創り

医学部 齋藤祐一郎 (麻布学園高等学校出身)

去年から始まったハロウィンパーティーは、今年から学校の支援・協力を得て、10月31日と11月1日の2日間に分けて行われました。元々は百合寮だけで行われていた学生主体の行事でしたが、後輩へ残していけるような思い出に残る富士吉田のイベントの一つになったと思います。当日はほとんどの学生が各々個性豊かな仮装で参加し、ドッキリ企画やバンド演奏で大きな盛り上がりを見せました。

私は今回、装飾部門の部門長として携わらせていただいたわけですが、ハロウィンパーティーの雰囲気作りを左右する責任ある役割でした。引き継ぎ書がないなか、かぼちゃをくりぬいてパンプキンのお化けを作るなどして飾り付けを作ることは非常に大変で、準備途中で失敗したこともありましたが、それでもハロウィンパーティーで成功を収められたのは実行委員をはじめ多くの友達からのサポートがあったからに違いありません。イベント終わりに労いや賞賛の声をかけてもらった時は、達成感や協力することの大切さを心から実感することができました。

最後になりますが、協力ならびに支援をしてくださった事務課の方々や先生方、司会の2人をはじめ仮装大会や演奏などに参加して盛り上げてくれた学生のみなさん、一緒に準備してきた実行委員の仲間へ感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

